資　料

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
［XIX］

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典*　訳注

総裁政府と第一帝政　（2）

風変りで気取ったこの時代は，建築物と家具類にバランスの取れた力強い様式と純粋な優雅さを生み出した。それらは地味な円柱や菱形や矢印や棕櫚の葉模様で飾られた簡素な線を持つ家具や，装飾としては屋根の棟の下に並ぶ小さな円窓しかない建物の正面にみられる。絵画においては，ダヴィッド[1]がネオ‐クラシック様式の作品を追求しており，プリュードン[2]は寓意画を描き，グロ[3]はボナパルトの肖像画を製作していた。ジロデ[4]はジョゼフィーヌの隠居所となるマルメゾン[5]のためにオシアン[6]礼讃の画を描くことになるが，その画面では剱と竪琴が和解しているようにみえる。英国人を真似て，カリカチュアが再び愛好されるようになる。ドビュクール[7]は軽薄な若者たちや「アテナイ人のように体にぴったりした服を着た美女たち」を描き版画にしている。デュプレシ‐ベルトーとカルル・ヴェルネ[8]の銅版画とリトグラフは民衆の情景を描いている。ベルナン・ド・サン‐ピエール[9]，サド，ビネ[10]が挿絵を描いているレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ[11]，ジェルメーヌ・ド・スタール[12]の初期の作品などが読まれる。自分の手帳に一種の日記を書いていたジュベール[13]は次のように記録している。「パリの街を流している夜の音楽家たちは小銭をもらうとその客の家の窓の下で甘い音楽を演奏してくれる。この音楽は淋しい

* 福岡大学人文学部名誉教授

通りから離れた夜の静寂の中で魅惑的である。」

総裁たちの間で，シエイエスとロジェ・デュコ[14]はクー・デタを計画し，旧熱月派のバラスと共に，1799年に憲法を改正しようと企てた。しかしどの将軍に呼びかけたらよいか？その時，10月にボナパルトが遠征[15]に出陣していたエジプトから帰国したのである。熱狂的な歓迎を受け，彼は軍事的情況を再建し和平を招来する天命を与えられた人物となった。人々は彼をシエイエスと協調させる。外交は最近アメリカから帰国したタレイランが担当し，警察はフーシェ[16]，司法はカンバセレスが受け持つ。ボナパルトは自分の妻となったジョゼフィーヌの邸に住む。この邸は昔はシャントレーヌ街と呼ばれていたが，当時はヴィクトワール街[17]と改称されていた通りにあった。彼は砲弾で装飾した三階の屋根裏部屋で仕事をしていたのである。

ボナパルトは自分の野心的な計画に好都合な土壌をパリに見い出した。89年の老世代は弱体化している。良心は腐敗しつつあった。自分に権力を保証しやがてフランスを再び独裁政治に投じることになる霧月18日の陰謀[18]を実行するのに，彼はなんらのためらいを感じなかったのである。彼の弟のリュシアン[19]が五百人会の議長だったが，五百人会はパリのジャコバン派の陰謀の裏をかくため，サン‐クルー宮[20]のオランジュリー・ホールに移転していた。ナポレオンは五百人会で独裁者扱いを受け，兵士たちに守られ議場の外に退室しなければならなかったが，弟の機智によって危地を脱した。その日の夕方，両院の何人かの議員は，シエイエス，ロジェ・デュコ，ナポレオンの3名の臨時統領に，新憲法を起草する権限を与えて政権を委任した。1799年11月9日の事である。統領政府が成立した。

統領政府[21]（1799-1804）

総裁政府は3年続き，統領政府は5年続くだろう。ボナパルトの最初の目標は，パリの自治体からすべての権限を取り上げ一つの行政機構を造り上げて，大革命の影響力を減少させることであった。旧制度のパリ市長をセーヌ県知事の名称で再建し，警察代理官の権力を警視総監に付与したのである。この県庁組織は，10年ほど前から何もしてこなかったパリに再び発展の力を与えたのである。

1800年12月24日，（当時ルーヴォワ広場にあった）オペラ座[22]にボナパルトが赴いた

時，彼の通る道に仕掛けた火薬樽に王党派が点火した。爆発の起った（旧カルーゼル広場へ通じる）サン‐ニケーズ街[23] の 46 軒の家が被害にあい取り壊さなければならなかった。死傷者は 32 名にのぼった。第一統領は難を逃れた。

1801 年 6 月，ボナパルトは憲法順守を表明した聖職者に対し，ノートル‐ダム大寺院での会議を開催する許可を与えている。しかし憲法順守を宣誓した司祭と拒否した司祭の協調には至らなかった。政教協約[24] がこの少し後に調印され，カトリック信仰が再建される。パリに支聖堂を持った 12 の教区に分割されている大司教座が復活する。商業が再生する。外国人が溢れる。しかし戦争が再開する。ヴァンデの乱の首領カドゥーダル[25] とピシュグリュ将軍が，統領政府転覆を企てる。英国で醸成された彼らの陰謀はパリで失敗する。カドゥーダルと彼の共犯者たちはグレーヴ広場で処刑され，ピシュグリュは自分のネクタイで絞殺されているのが刑務所の内部で発見されるのである。

第一統領は情容赦の無い厳重な警察の下にパリを置いた。自分のライヴァルになる危険を感じた彼は，その相手，上品な外交官でグラン・コンデの曽孫であるアンギアン公爵[26] を処刑しパリ市民を戦慄させたが，市民たちはこの卑劣な行為に恐怖政治への逆行をみたのである。「虎は血の臭いを感じた」とタレイランは叫び，これ以後は生きる楽しさはないと思ったのである。

総裁政府の快楽の後に，人々は社交生活の再会に立ち会う。亡命貴族たちは，成上り者たちの粗野で辛辣な言葉にとって代る趣味や行儀作法を持ち帰ってくる。将軍たちは社交界よりも戦場で気楽に振舞っている，と人々は噂しあった。「サロンを持ちたまえ」とボナパルトは部下の士官たちに言っていたのは，彼らの夫人がしばしば「礼儀知らずの奥さん」であったからである。という訳で，フォーブール・サン‐ジェルマンの囚人にならないようにしながら，第一統領は旧制度の帰還者たちに取り囲まれる事を好んだ。「あなたの控えの間が昔の貴族共で溢れるようになったら，決して落着いてはいられませんよ」とシエイエスは彼に言ったのである。

チュイルリ宮においては，モンテソン夫人[27] が宮廷の接見を取りしきっていたが，まだ宮廷と呼べるものはなかったし，ジョゼフィーヌが同伴した女性たちは彼女の友人かお追従者という肩書しかなかった。誰もがからんどうのようにみえる壮麗な部屋に出頭したが，夕方になるとガタガタになった幾つかのシャンデリアが心細い明りを灯すだけだった。回想録を残したある貴夫人は，1803 年に見たジョゼフィーヌを次の様に描いている。彼女は棕櫚の葉飾りで二重に縁取りした白いカシミヤの服を着ていた。ダイヤの留金でとめ

た緑色のベルトをし，レースのケープが唯一の装身具だった。彼女は帽子を被らず，長い編毛を小さな櫛でとめていたが，その先端は捲き毛となってふわりと両肩にかかっていた。彼女は 40 歳だった。彼女の歯はすでに抜けていた。彼女の横で，ナポレオンの母レティシア[28] は白い帽子を被り，さくらんぼ色のサテンの服を着ていた。

すらりとした体で，軽くびっこをひいているが優雅さを失うことなく，髪に髪粉をし，青い瞳，他人の不用意な言葉を聞き洩らすまいと注意し，唇に微笑を浮かべ —— というのも微笑は常に無害なので —— タレイランが登場する。かってはオータン司教で次に亡命者となり，次に総裁政府の大臣，そして今や外交を担当している。またその警察によりすべてを支配しているのがフーシェである。

第一統領が最後に現れる。「完璧な軍服姿で，両肩の大きな金の肩章以外の装身具はない。白いピケ織りのチョッキ，緑色のズボン，黄色い折返し革のついた長靴をはいていた。」「オリンポス山に更に一歩を進める」という夫の熱望を感じたジョゼフィーヌが王党派との関係を復旧したらと言うと，ボナパルトはラ・フォンテーヌをもじって次のように答えた。「10 年たてば，国王も驢馬も私も，皆死ぬだろうよ。」[29] 霧月 18 日ですべてに区切りをつけ，自分の統治の開幕と共に世界が始まる事を彼は望んだのである。

彼の目的は革命的骨組みを粉砕し，手中に収めた苛酷な権力でクラブの勢力を退場させることであった。すでに自分のために軍事力を掌握した彼は，絶対的権力の確保のために準備していた。参事院の創設はこれ以後彼に行政権を保証する。

他の 2 人の統領，法学者のカンバセレスとルブラン[30] の邸では，チュイルリ宮ほど多くの軍服を見られなかった。タリアン夫人は迎えられなかったが，しかしながら彼女は常にバラスのサロンで輝いていた。ジェルメーヌ・ド・スタールの邸では，バンジャマン・コンスタン[31] が総裁政府と総督政府の行為を厳しく断罪したが，これを第一統領が恐れていた。装飾品を全くつけない髪，簡素な白衣を着，栗毛の髪をカールして垂らしたレカミエ夫人[32] はアベイ‐オ‐ボワを支配していたが，そこはセーヴル街[33] の旧修道院で，シャトーブリアンが訪問していた。この 2 人の女性，美しいジュリエットとスタール夫人を，ボナパルトは「サロンの火付け女」とみなしていた。

他の人々にとって，すべてが憂鬱だった。機智は姿を消す。会話もない。ロベールやノデやヴェリ[34] といった料理店で人々はたらふく食べる。モロー兄弟が経営するパレ‐ロワイヤルのカフェ・カヴォー[35] に人々は通うが，その店ではカウンターに向きあった 4 本の円柱の上に，ピッチーニ[36]，グルック[37]，グレトリ[38] の胸像が飾ってあった。芝居を見

に，フェドー座[39]，ポルト‐サン‐マルタン座[40]，オペラ座[41]やフランス座[42]に人々は足を運んだが，フランス座では悲劇女優のジョルジュ嬢[43]が腕を動かすと芳香を放つと噂された。

ワイマールの反ロマン派でゲーテのライヴァルにして『ドイツ小都会の市民』*Die deutschen Kleinstädter* の多作家コッツェブー[44]が，平土間の拍手と共に迎えられたナポレオンの桟敷席に観客すべての視線が注がれるのを見たのも，この国立劇場であった。別の日，このドイツ人作家はカルーゼル広場[45]に降りてくる第一統領を見かける。「豪華な軍服を着た将軍や副官たちに取り巻かれていたにも不拘，彼は縁取りもなく勲章もつけず，全く無地の軍服を着ていただけだった。彼の軍帽にも羽根飾りもなく金モールもついていなかった。彼は非常に速く歩き，手には鞭しか持っていなかった。」

当時の女性たちは目のつまった薄いインド産の木綿地の長いスカートをはき，手首の所でボタン止めにしたアマディス風のレースの胴着は首まであり，ベルギーのマリヌ産のレース飾りをつけた襟をしていた。頭には黒ビロードの縁なし帽を被り，２本の白い羽根飾りをつけていた。裸身を透けて見せていた服の後に，全身をかくし全身を熱望させるような服が登場したのである。男たちは広い縁のある帽子を被り，ビロードの半ズボンをはき，ぴったりした服を着，明るい色の折返しのある乗馬靴をはいていた。

小売商が復活する。露天のため街角や広場の交通が渋滞する。リヴォリ街[46]やカルーゼル広場は清掃される。統領政府時代，パリにはとりわけアルスナル図書館[47]とサント‐ジュヌヴィエーヴ図書館[48]が寄贈される。病院とホスピスを総括する行政組織が創設される。ドムーティエ[49]が「芸術橋」ポン・デ・ザール[50]架橋を指揮するが，この橋は鉄橋で８本の支柱で支えられ人だけが通行を許可された。ボジオ[51]がパノラマ紙をデザインする。英国亡命から帰国したシャトーブリアン[52]は『キリスト教精髄』[53] *le Genie du Christianisme* と『アタラ』*Atala*[54]を出版する。

（続く）

パ　　リ
—— 誕生から現代まで ——
（訳　注　XIX）

１）Jacques Louis David（1748-1825）：フランスの画家で新古典派の指導者。ブーシェらに学び，1774 年ローマ賞を獲得，イタリヤに留学し「ベリサリウス」*Belisarius* などの傑作により新古典派を形成，アングルやグロをはじめ多くの弟子を養成し，フランス画壇に大きな影響力を及ぼした。大革命に共鳴し，1702 年国民公会議員となり，ルイ 16 世処刑に賛成票を投じたため，王政復古の時に国外追放となってベルギーのブリュッセルで客死した。彼の描く歴史的社会的題材は写実的迫真力を持ち，「マラーの死」*La Mort de Marat* はその代表作。ナポレオンに愛され，「サン - ベルナール峠のナポレオン」*Bonaparte au mont Saint-Bernard* や「戴冠式」*Couronnement de l'empereur* を描いた。

２）Pierre Paul Prud'hon，本名は Pierre Prudon（1758-1823）：クリュニー修道院で教育を受け，そこの壁画に刺激され画家を志す。パリとディジョンで学び，1785 年から 88 年までローマに滞在，アレキサンドリアやポンペイの美術を発見，また特にレオナルド・ダヴィンチに影響を受けた。パリに帰り（1789），多くの肖像画や壁画を製作した。徐々に人気が高くなり，1802 年にコンスタンス・メイエルと会ってから才能が一気に開花した。彼は好んで寓意的神話的主題をとりあげた（「ヴィーナスとアドニス」*Vênus et Adonis*，1812）。彼の描く人物のもつ夢想的でメランコリックな官能性，斜線の構図への趣味，柔らかな線の輪郭などはロマン主義を予告している。彼はダヴィッドと共に，当時の古典主義運動の代表者であった。

３）Antoine Jean，baron Gros（1771-1835）：フランスの歴史及び肖像画家。1785 年にダヴィッドのアトリエに入門，師から愛される弟子となった。イタリヤに留学（1793），ジョゼフィーヌの紹介でナポレオンを知り，「アルコラ橋のナポレオン」*Bonaparte au pont d'Arcole*（1798）を描いて，彼の愛顧を受けるようになる。パリに帰国後（1801），多くの戦争画を製作，ナポレオンを描いて（「アイラウの戦場」*Le Champ de bataille d'Eylau*，1808 など），ナポレオン神話の醸成に貢献した。王政復古後も多くの弟子を育成したが，勃興してきたロマン派から時代遅れの古典派の巨魁として痛烈に批判攻撃され，傷心の余り，セーヌ川に投身自殺した（1835.6.25.）。

４）Anne Louis Girodet de Roucy または Girodet-Trioson（1767-1824）：彼もまたダ

ヴィッドの弟子で，プリュードンからも影響をうけた。医者のトリゾンの養子になったので，上記の名も名乗った。イタリヤに5年間滞在，1792年のサロンに「エンディミオンの眠り」*Sommeil d'Endymion*（ルーヴル美術館蔵）を発表した。この作品は古代的テーマや彫刻的扱いにも不拘，ロマン主義的インスピレーションを感じさせる。1808年にオシアンから霊感を得て，彼はマルメゾンのために作品を製作，またシャトーブリアンの肖像画もまた彼の作品の『アタラ』から「アタラの埋葬」*Les Funérailles d'Atala* も描いている。他にも風景画，歴史画も描き，詩も随筆も書いている。

5）正確には Rueil-Malmaison：パリ西方オート‐セーヌ県ナンテール郡の郡庁所在地で，現在の人口は約63,000人。国立博物館と館がある。17世紀に建築された邸をジョゼフィーヌが1799年に買収し，各建築家のペルシエとフォンテーヌに依頼して翼棟とヴェランダを増築した。第一統領となったナポレオンはしばしばこの邸に宿泊し，優雅な魅力をたたえたジョゼフィーヌと過した。600着の服を持っていた彼女は日に何度も着替えたといわれ，二人は最も幸福な結婚生活を送った。ナポレオンと離婚した（1809）後も彼女は此処に住み，ここで死去した（1814.5.29.）。セント‐ヘレナ島に流される直前，ボナパルトは此処を訪れている（1815.6.29.）。この邸はその後多くの人の手に渡ったが，1904年に国に寄付された。ナポレオン関係の遺品や資料が蒐集され，博物館は1906年に開館された。

6）Ossian：紀元3世紀に活躍したとされる伝説的なケルトの吟遊詩人。彼の作品が知られるようになったのは，スコットランド生れの James Macpherson（1736-1796）が，オシアンの原作を英訳したと称して出版した『オシアン詩集』（全2巻，1765年刊）からである。当時流行していた古代趣味に合致して各国語に訳され大いに愛読され，ナポレオンも愛読者の一人であった。しかしマクファーソンの創作とする説も有力で，真偽論争に明確な決着は現在でもついていない。

7）Philibert Louis Debucourt（1755-1832）：パリ生れの画家，版画家。ヴィャン（1716-1809）に学び，美しい画面で有名になり，多くの絵画蒐集家の垂涎の的になっている。「パレ‐ロワイヤルの散歩道」*Promenade au Palais-Royal* とか「狩の帰還」*Retour de la Chasse* などが代表作。1782年に絵画アカデミー会員となり国王お抱え画家に任命された。1785年頃に英国人によって紹介された版画に魅了されて製作に没頭し，完全に再現することに成功した。「村の結婚式」*Noce de village* とか「獅子に脅える馬」*Cheval effrayé par des lions* などがある。また彼は蝕刻凹版の一種アクアチントにも手を染め，

ほぼ同様の成功をおさめている。国立図書館が彼のこれらの作品を収蔵しているが，「聖具室の内部」*Intérieur d'un sacristie* が代表作。

８）Antoine Charles Horace，dit Carle Vernet（1758-1836）：父ジョゼフ（1714-1789）も有名な風景画家だったが，子のカルルは戦場の画家で，総督政府，第一帝政時代の大会戦を描いている。マレンゴ（1800.6.14.），アウステルリッツ（1805.12.2.），リヴォリ（1797.1.14.-15.），ワグラム（1809.7.6.-5.）の戦勝場面を描き，更にサン‐ベルナール峠越えのナポレオンの雄姿も描いている。王政復古になると当時の生活情景や猟犬を使った狩猟の場面を描いている。この他多くのリトグラフや肖像画を残している。

９）Jacques Henri Bernardin de Saint-Pierre（1737-1814）：フランスの作家，博物学者。最初は軍人として次は土木技師として，マルタ，ロシア，ポーランド，ドイツを遍歴，1768 年から 71 年まで技術主任としてフランス島（現在のモーリシャス島）に派遣された。帰国後ルソーと親交を重ね，自然愛好心を育てた。『フランス島への旅行』*Voyage à l'île de France*（２巻，1773 年刊）に次いで 1784 年に出版した『自然研究』*Etudes de la nature*（３巻）とその巻末に収録されていた『ポールとヴィルジニー』*Paul et Virginie* という牧歌的恋愛小説で有名になった。大革命により新設されたパリ植物園の園長に任ぜられ（1792），エコル・ノルマルの哲学教授を務め学士院会員となった（1795）。ルソーの友人として楽天的な信仰をもち熱烈な自然賛美者であった彼は，「我々の幸福は自然と美徳に従って生活することにある」と主張した。彼の夢想したユートピアは感動的で純朴であり，彼の描く異国の自然の美と魅力はフランス文学にエクゾチスムを導入している。自然に包まれた憂愁の趣味，荒野の孤独感はシャトーブリアンの先輩でありピエール・ロチの祖父としての地位を彼に与えている。その点でロマン主義の先駆者の一人である。

10）Louis Binet（1744-？）：パリ生れのフランスの版画家で 18 世紀末に死亡したらしい。彫刻家で版画家の Pierre Nicolas Beauvalet（1749-1816 か 1828）に学び，簡潔で力強いノミ使いで製作した。レンブラントによる「善きサマリア人」*Bon Samaritain*，「雷に打たれた船」*Vaisseau fourdroyé* はヴェルネの原画による。またグルーズの「お母さん」*Maman*や「アネットとリュバン」*Annette et Lubin* などがある。

11）Nicolas Edme Restif de la Bretonne（1734-1806）：農民の子で，幾つかの職を転々とした後，印刷工として王室印刷所に勤務し，親方になった。２度結婚し，娘たちや孫たちに尊敬された家長だったが，裏で長い間放蕩生活を送った。性に対する一種の狂信者で，近親相姦の観念に取り付かれ，男性が絶対的支配者で女性は幼時から絶対的服従者である

というエロティスムの国家を夢想していた。しかしながらルソーの感化を受けて社会改革の意欲も持ち，性産業の改善のため売春宿の国営化を提唱している。彼は鋭利な観察で18世紀末のパリ市民の生活の現実を描き，貴重な風俗資料を残した。250篇余にのぼる多くの作品を書いたが，写実的風俗描写と共に好色的であったため当時の世評は芳しくなかった。代表作は『堕落百姓』*Le Paysan perverti*（1775），自伝小説『ニコラ氏』*Monsieur Nicolas*（1794-97）などが挙げられる。

12）Madame de Staël（1766-1817）：旧姓 Necker，全名 Anne Louise Germaine, baronne de Staël-Holstein。フランスの文学者。父はルイ16世の財務総監ジャック・ネッケル（1732-1804）で，少女時代から天才少女の評判があった。モンテスキューやルソーの著作を愛読し，自宅のサロンに集まる当代一流の名士たち，ディドロ，ダランベール，ビュフォン，グリムらと親しく接した。1786年，パリ駐在スエーデン大使 Erik Magnus Staël-Holstein（1749-1802）と結婚した。彼は彼女より17歳も年上で，彼女の財産目当だったという。彼女は勃発当時は大革命に賛同していたが，それが過激化するのに不安と嫌悪を覚え，尊敬する父が隠退していたジュネーヴ近郊のコペの邸に避難して（1792），この地で亡命貴族として生活し文筆活動を続けた。熱月9日の恐怖政治の終結をみて，パリでの活動意欲を抑え難く，1797年4月からバック街に定住してサロンを開き，文筆活動とともに社交生活を再開した。彼女の熱烈な自由主義思想はナポレオン皇帝の専制政治を鋭く批判する事になり，バック街のサロンは反ボナパルト派の巣窟とみられた。サロンの常連の中でも1794年にコペで親交を結んだバンジャマン・コンスタンが，その穏健な共和思想と立憲王政主義とその基盤となる自由主義的精神で首領格と目された。彼はナポレオンと不和になり，皇帝に私怨を抱くに至る。スタール夫人も大著『文学論』*De la littérature*（1800）の中で，文学創造の鍵は自由な精神の独立にある，と主張してナポレオンの不快感を増幅させ，遂にパリ所払いの弾圧を招いてしまう。彼女はその後ナポレオンの失脚までスイス，ドイツ，イタリヤ，ポーランド，ロシア，イギリスなど各国で亡命生活を送らねばならなかった。しかしこの間にドイツではゲーテ，シラー，シュレーゲルらと交遊し，大いに見聞を広め，創作に多大の恩恵を受けている。『ドイツ論』*De l'Allemagne*（1814）はこれら文化人との交遊から産み出されたもので，ドイツ・ロマン主義や観念論哲学をフランスに紹介し，フランス・ロマン主義の形成に大きな影響を与えた。この作品にみられるドイツ礼賛が再びナポレオンの怒りを激発させた。バンジャマン・コンスタンとの嵐のような恋愛とその破局を体験した彼女は，愛に苦悩する女性の憂愁と

煩悶と悲しみを赤裸々に描いて（『デルフィーヌ』*Delphine*，1802，『コリンヌ』*Corinne*，1805），社会の因襲に虐げられ，男性の横暴に泣く女性の立場を擁護している。シャトーブリアンと共に彼女をロマン主義の先駆者たらしめているのは，このような彼女の文学活動によるものといえよう。

13）Joseph Joubert（1754-1824）：フランスのモラリスト。トゥールーズで教師生活の後にパリに上京（1778），文学に専念しながら，ボーモン夫人やレカミエ夫人のサロンに通い，マルモンテル，ラアルプ，ダランベール，ディドロ，シャトーブリアンらと交友し，特にルイ・ド・フォンターヌ（1757-1821）と親友になった。彼がナポレオンの愛顧を受けパリ大学総長になった時，彼はジュベールを視学監に任命し（1809），次で顧問に就任させた。病弱なため生涯の多くの時間を書斎で思索と執筆に過したが，彼の折々の思索の随想は生前に出版されず，遺稿を預ったシャトーブリアンが編集して，その抜粋が『随想』*Recueil des pensées* として出版されたのは，1838 年のことである。その透徹した思考力，感性の高貴さと繊細さはその卓抜した文体と共に高い評価を受け，ジュベールを一流のモラリストたらしめている。

14）Pierre Roger Ducos（1754-1816）：故郷のランド県で弁護士をし，国民公会議員としてランド県から選出され（1792），モンタニャール派に属し，ジャコバン・クラブの議長になる（1794）。総裁政府時代，元老院議員となり，共和暦 5 年実月 18 日（1797.9.4.）のクー・デタでバラス，ルベル，ラ・ルヴェリエール - レポの 3 人の総裁に協力，王党派のカルノーとバルテルミの 2 名の総裁たちを追放した。しかしながら左派ジャコバン派の勢力拡大を恐れた総裁政府は，共和暦 6 年花月 22 日（1798.5.11.）のクー・デタで左派勢力を追放し，ロジェ・デュコも追放された。しかし共和暦 7 年牧月 30 日（1799.6.18.）のクー・デタで両院は穏健派の 2 名の総裁を追放し，ジャコバン派が勢力を回復し，ロジェ・デュコも総裁に任命される。彼はシエイエスに忠実に従って，ナポレオンの霧月 18 日のクー・デタに協力し，ナポレオンはその報酬として彼を新政府の三人の統領の一人に選任させた。帝政時代には元老院副議長を務め伯爵に敍せられた。帝政崩壊後，王政復古となり，弑逆者として国外追放となり，亡命中に馬車の事故で死亡した。

15）エジプト戦役 Campagne d'Egypt：カンポ・フォルミオ条約の成立（1797.10.17.）により，ヨーロッパ大陸における敵対勢力を一掃したフランスは，独り抗戦を続行するイギリスを打倒すべく，東方との交通の要となっているエジプトを占領し，イギリスの勢力を地中海から追い出そうとした。1798 年 5 月 19 日，トゥーロン港を出港したフランス軍

32,000 名はマルタ島を占領（6.11.），ネルソン指揮のイギリス艦隊の追撃をかいくぐり，アレキサンドリア近郊に上陸，7 月 2 日に同市を占領した。ナポレオンはエジプトとイスラムの伝統を尊重しエジプト民衆を圧制者マムルークから解放する旨の布告を発し，自由をもたらす者として接する態度を明確にした。7 月 21 日，ピラミッドの戦いでマムルーク軍を撃破し，7 月 23 日にカイロに入城し陸上作戦は成功するが，フランス艦隊はアブキール湾でネルソンのイギリス艦隊に撃滅され（1798.8.1.），フランス本土との連絡を遮断されてしまう。この敗戦に鼓舞されたトルコがフランスに宣戦しシリヤに軍を集結したため，ナポレオンは砂漠を強行突破してトルコ軍をエル‐アリクで撃破（1799.2.14.），ガザとヤッファ両市を占領，ダマスカスから南下して来たトルコ軍をタボール山麓にて再び破った（4.16.）。エジプトに帰ったナポレオンはトルコ軍の上陸を撃退するが，この戦いが第 2 次アブキール会戦である（1799.7.25）。しかし本国における総裁政府の弱体化とクー・デタの機が熟しつつあるのを知った彼は，後事をクレベール将軍に托し（8.25.），秘かにエジプトを脱出，ネルソンの監視網をくぐり抜け，10 月 9 日帰国したのである。このエジプト遠征は，ロシアとトルコをイギリス側に走らせ，第 2 次対仏同盟を結成させる契機となり，フランスとしては政治的には失敗だった。しかしロゼッタ・ストーンの発見からヒエログラフの解読により古代エジプト研究に大きな手掛りを与えた文化的功績は大きい。後に残されたフランス軍はクレベールが暗殺された後，結局イギリスに降伏し，残存兵はフランスに送還された。

16）Joseph Fouché, duc d'Otrante（1759-1820）：オラトリオ会の学校で学ぶが宗門に入らず，教師生活の後，国民公会議員となり（1792），政界に進出しジャコバン派の一員としてリヨンの反革命派の大量処刑を断行した（1793）。ロベスピエールと対立してジャコバン派を除名されるや，熱月 9 日（1794.7.27）のクー・デタに参加し宿敵を打倒する。バラスの援助で 1799 年 7 月に警察大臣となってその本領を発揮，密偵網を張りめぐらし政敵の逮捕と治安維持に貢献する。霧月 18 日（1799.11.9.）のクー・デタで政権を握ったナポレオンも，彼の才腕を認めて警察大臣を続けさせた。彼はそれまでの功績により 1808 年オトラント公爵に敍せられる。時流に敏感な彼はナポレオンの没落を感知するや，忽ち王党派に転身し，ルイ 18 世の王政復古に協力，ドレスデン駐在大使に任命される。しかしルイ 16 世弑逆者追放を定めた 1816 年 1 月 12 日の法令により官職を追われたが，在職中に掻き集めた巨満の富を手中にしてトリエステで悠々自適の晩年を送り，同地で歿した（1820.12.25.）。乱世を巧妙に生き抜いた典型的な謀略政治家である。

17）rue de la Victoire：第 9 区にあり，ラ・ファイエット街とジュベール街を結ぶ長さ 720 米，最小幅 12 米の通り。この道は，1675 年には存在し，フォーブール・モンマルトル街とショッセ‐ダンタン街を沼地を横切って結んでいた。この小路は 1731 年にシャントレル小路 ruelle Chanterelle と呼ばれるようになり，1734 年には入市税徴集人の使用人が住む哨所 poste がこの小路の両端に設置されたため「哨所小路」ruelle des Postes と呼ばれるようになった。砲兵及び工兵隊の財務長官ブルネ・ド・ヴェズレー（1733-1810）がこの周辺の土地を買収して宅地に整備したため地価は高騰し，小路も改修されシャントレル街 rue Chanterelle になった。1776 年頃の事である。「シャントレーヌ（歌う女王）街」rue Chantereine とも呼ばれたのは，周辺の沼地で絶えず鳴いている蛙にかけて，「シャントレル」が訛ったものである。その後オルレアン公が馬係の従者を居住させるためにこの道を舗装させた。共和暦 6 年雪月 8 日（1797.12.28.）に革命政府は王政の遺物はすべて消去させる布告を出し，この通りは「勝利街」rue de la Victoire と改名された。1802 年にこの通りは 8 米に拡幅され，1847 年に延長され現在に至っている。

ジョゼフィーヌが住んだ邸は 44 番地にあり，1777 年にオペラ座の女優デルヴィユー嬢のために建築家アレクサンドル・テオドール・ブロンニャール（1739-1813）によって建造された豪邸である。彼女は此処で多くの有名な愛人と交際して暮している。リシュリュー元帥，シャルトル公，コンティ公，コンデ公，アルトワ公などがあげられる。1793 年にこの邸は売却され，コメディー‐フランセーズの女優エリザベート・ランジュの手に渡り，1802 年 7 月 27 日にナポレオンが買収し，豪華な家具を購入し内部装飾を完成させた。この邸は何人かの持主の手に渡り，1867 年に取り壊され，その跡地にはユダヤ教会が建築された。

18）霧月 18 日のクー・デタ：共和暦 8 年霧月 18 日（1799.11.9.）にナポレオンが総裁政府を打倒し統領政府による独裁を確立したクー・デタ。シエイエス，デュコ，フーシェ，タレイラン，元老院の協力と五百人会の議長を務めていたナポレオンの弟リュシアンの努力と機転により，また王党派の復活を阻止しようとした共和派の協力も得て成功した。まず両院を過激派が多数を占めるパリ市民の圧力を受けないように，郊外のサン‐クルー宮に移転させ，パリ地区司令官に任命されたナポレオンは軍の威力を背景にシエイエスを含む総裁 4 名を辞任させ，飽くまで抵抗する議員を銃剣によって議場の外に駆逐し，ナポレオン支持派の議員のみで会議を続行，新憲法制定まで議会を休会し，その間の行政権は総裁に代る 3 名の統領による臨時政府が行使することを決議させた。かくしてフランス大革

命は終了し，総裁政府も崩壊，軍部独裁の帝国の道が開かれたのである。
19）Lucien Bonaparte（1775-1840）：ナポレオンのすぐ下の弟で兄弟全体からいうと三男である。兄ボナパルトを除くと最も才能があり，特に霧月 18 日翌 19 日のクー・デタで危機に陥いった兄を天性の気転と雄弁で救出した。オータン高校からブリエンヌ幼年学校を卒業，1797 年に五百人会議員ついで議長に就任，この時に議会のサン - クルー宮移転，議場への武装兵の導入など，クー・デタ成功のため最大の努力をした。第一統領になったナポレオンは彼を内相に任命（1799），ついでスペイン駐在大使に発令（1800）した。リュシアンはこの間スペイン国王カルロス 4 世を親仏派にしている。帰国後に法制審議院（護民院とも訳す）議員となるが，兄ナポレオンの独裁権力志向に賛成できず不和となり，更に彼が自分の再婚に反対したために兄弟間の対立は決定的となった。リュシアンの再婚相手マリ・アレクサンドル・ド・ベルシャン（1778-1855）が株式仲買人の未亡人であった事も，栄達の途上にある兄からみて自分の弟の嫁に相応しくないと映じたのであろう。和解のため兄が提供したイタリヤやスペイン国王の王冠を拒絶し，彼はローマ教皇ピウス 7 世が彼のために設立してくれた公園カニノに引退する（1804）。彼は兄との接触を絶つためアメリカへ出帆するが（1810），途中でイギリス海軍に捕われて 1814 年まで抑留されてしまう。百日天下の時，兄ナポレオンと束の間の和解をするが，その後は再びイタリヤに戻り，一私人として暮した。彼は兄とちがって子福者で，最初のクリスチーヌ・ボワイエとの間に娘 2 人，再婚したマリとの間に 9 人の子に恵まれた。
20）palais de Saint-Cloud：パリの西南西約 10 粁の所にある。セーヌ川左岸に広がるパリの郊外住宅地の一角にあった。現在ではその庭園がサン - クルー公園として整備され，王宮の遺跡の大滝，大噴水，テラス，イギリス式庭園のトロカデロ庭園が広がっている。クロヴィスの孫クロドアルドは宗門に入り，ここに僧院を建立し，560 年に歿するが，その後彼の墓が巡礼地となり，この墓の周囲の村がサン - クルーと呼ばれるようになった。クロドアルドはこの地をパリ司教に遺贈したので，パリ司教は 1839 年までサン - クルー公爵の称号を持ち，貴族院議員となっている。16 世紀になり時のパリ司教ピエール・ド・ゴンディが館を建てたが，この建物の中でアンリ 3 世が狂信の修道士ジャック・クレマンに暗殺された。1658 年ルイ 14 世の弟オルレアン公フィリップが購入，名建築家マンサールに命じて大規模な増改築を行った。1785 年マリ・アントワネットが購入し夏の離宮として利用する。大革命時代は国有財産となり，オランジュリのホールが霧月 18，19 両日のクー・デタの舞台となったのは前述の通りである。権力を奪取したナポレオンは特にこ

の宮殿を愛してよく滞在している。彼がマリア‐ルイザと結婚したのも，シャルル 10 世が 7 月勅令に署名したのも，ナポレオン 3 世がプロシャに宣戦布告したのもこの宮殿である。残念ながら宮殿の建物は普仏戦争中にプロシャ軍によって破壊放火され（1871），1891 年に取り壊された。ル・ノートル設計の 400 ヘクタールに及ぶ名園は多くのパリ市民が愛好する散策地である。

21）Le Consulat（1799-1804）：霧月 18 日（1799.11.9.）のクー・デタで総裁政府に代り，1799 年 10 月 10 日から 1804 年 5 月 18 日まで存続した。元老院の議決により，ボナパルト，シエイエス，ロジェ・デュコの 3 人が臨時の統領に指名され，共和暦 8 年の憲法により新政府が成立，ナポレオン，カバセレス，ルブランの 3 名が新統領に任命された。しかし第一統領ナポレオンが実権を掌握し，他の 2 名は顧問程度の役割しかなかった。第一と第二統領の任期は 10 年，第三統領は任期 5 年であった。第一統領は法律を公布し，大臣，大使，参事院議員，陸海軍将校，官吏，治安判事と最高裁判所にあたる破毀院判事を除く刑事，民事の判事の任免権を独占した。この強大な行政権に対し，司法権は法制審議院，立法院，元老院の 3 院に分立していた。ナポレオンはまた対オーストリー戦においてもマレンゴの輝しい勝利（1800.6.14.）で卓越した軍人としての武勲をあげ，モロー将軍のホーエンリンデンの会戦の勝利（1800.12.3.）と相待って，リュネヴィル条約の調印（1800.1.15.），アミアン条約の締結（1802.3.25）で，フランスに平和をもたらした。またローマ教皇ピウス 7 世と政教条約を結び，カトリック教会と和解し，フランス人民に信仰の自由を復活させる（1801.7.16.）。県知事と大都市の市長，助役の任免権を確保し地方制度を中央集権化して整備した。フランス銀行を設立して経済改革を断行し財政再建に成功する。1802 年制定のレジオン・ドヌール勲章法は名誉と年金を軍人に与えて彼らの忠誠心も確保した。1804 年 3 月に発布された「フランス人民法典」俗にいう「ナポレオン法典」は人権宣言の理念を具体化した画期的近代法典であった。ナポレオンのこのような多彩な功績に軍人はもとより政財界や一般市民も眩惑され，第一統領を終身統領に任じ（1802.8.5.），次で 1804 年 5 月 8 日元老院は 142 条から成る元老院令を議決して憲法を改正し，第一統領の名称を皇帝に変更し，ナポレオン皇帝が誕生するのである（1804.12.2.戴冠式）。商工業は復活し，治安は改善され首都パリは繁栄を取り戻す。秩序の再建と経済危機の克服という重要課題を短期間に解決した事が，統領政府の功績といえよう。

22）ルーヴォワ広場のオペラ座：正確にはルーヴォワ街 6 番地にあった。第 2 区にあるルーヴォワ街はリシュリュー街とサント‐アンヌ街を結ぶ長さ 116 米，最小幅 9.6 米の通

りで，1784 年にルイ 14 世の陸相ルーヴォワ侯の邸跡地に開通した。その子孫が邸跡地を 14 区画にして分譲し，その一つの 6 番地に 1792 年に劇場が建設され「ナショナル座」後に改名されて「芸術座」théâtre des Arts として 1793 年 8 月 17 日に開場した。1795 年 6 月に国家が買収し，1794 年 7 月 28 日からオペラ座が入った。1820 年 2 月 13 日，この劇場から退出してきた未来の王位継承者でシャルル 10 世の次男のベリー公爵が反王党派の職工により暗殺される悲劇の舞台になった。オペラ座はこの事件の後に閉鎮され後に取り壊された。跡地は現在パリで最も美しい泉水を持ったリシュリュー広場になっている。

23）サン - ニケーズ街の暗殺未遂事件：1800 年 12 月 24 日午後 8 時頃，オペラ座のクリスマス・イヴのコンサートに出席するため，ナポレオンは馬車でチュイルリ宮を出発した。ジョゼフィーヌとその娘は別の馬車に乗っていた。一行が，ロングヴィル邸の庭の塀に沿った狭いサン - ニケーズ街にさしかかると麦藁を積んだ荷車が通りをふさいでた。ナポレオンの車列は一旦停車し，荷車を脇にどかしてそこを通りすぎた時，突然その荷車が爆発し，後続の車や通行人や附近の家屋を吹き飛ばしたのである。死傷者約 30 名，被害を受けた家屋は 50 軒余りがでる惨状だった。ナポレオンは後に被災した家屋 46 軒を 1806 年に取り壊さなければならなかった。王党派のサン - レジャンとカルボンなる人物が屑鉄と火薬を詰めた樽を麦藁の下に隠し，第一統領が通過するのを狙って爆発させ一命を奪う予定だった。この「地獄の仕掛け」machine infernale は爆発が少し遅れたため暗殺は失敗し，ナポレオンは間一髪で危地を脱したのである。予定通り，オペラ座に行き，ハイドンの「天地創造」を聴きながら，ナポレオンはこの事件を好機として，直ちに犯人逮捕の活動を開始，法制審議院や議会の 5 分の 1 を追放，73 ある新聞のうち 61 紙を発禁にした。サン - ニケーズ街はシャルル 5 世の城壁に沿っていた小路でチュイルリ宮の前を通っていた。ルイ 9 世が創立した盲人を収容するホスピスの礼拝堂が聖ニケーズ礼拝堂だったのでこの名がある。この通りはオスマン男爵のパリ大改造の折に付近の多くの小路と共に消滅し，現在は cour de Carrousel の一部になっている。

24）Concordat：1801 年 7 月 15 日，ローマ教皇ピウス 7 世（在位 1800-23）の代理でローマ教皇庁長官エルコレ・コンサルヴィ枢機卿（1757-1824）とナポレオンの代理ジョゼフ・ボナパルト（1768-1844）との間で調印されたフランスとローマ教会の協約。この協約により，大革命以来フランス国内の無宗教時代は終り，ローマ・カトリック教会が公認され，信仰が復活した。ローマ教会はフランス共和国を承認し，共和国はカトリックがフランス人大多数の宗教である事を承認する。ローマ教会は教会財産の売却を了承する。司教の任

命権は第一統領に属し，司教は政府の同意の下に司祭を任命する。司教をはじめ聖職者の給与は政府が支給する。以上がこの協約の要約だが，全体的にみて第一統領の権力に教会が譲歩している。これは当時のナポレオンの特に軍事的勝利の栄光が，どちらかというと妥協的で柔和なピウス 7 世を畏怖させた故かもしれない。教会は国家に従属的になり，王党派の勢力がこれと共に弱体化していった。

25）Georges Cadoudal（1771-1804）：ブルターニュ半島南部モルビアン県オーレ郡カルレアク‐アン‐ブレクの村の粉屋に生れ，幼時から神童の誉がたかかった。革命政府によるキリスト教迫害に憤慨，1793 年 3 月に蜂起した反革命派の「ふくろう党」Les Chouans に参加， 7 年にわたる闘争に従事した。しばしばロンドンに行き，亡命貴族たちの協力を得ていたが，この間にアルトワ伯から陸軍中将に任命されている（1800）。ヴァンデの乱と呼ばれるようになるこの凄惨な内乱の束の間の休戦期間中，彼はパリで 2 度ナポレオンと会っている。ナポレオンは彼に陸軍中将の地位と年金を約束し帰順を促したが，カドゥーダルは之を拒否している。弟ジュリアンの処刑と親友メルシエの死が，第一統領との和解を阻んだのである。ロンドン亡命から帰国しナポレオン暗殺を企てたのは，イギリスがフランスに再び開戦するという好機が到来したからである。彼は反ナポレオン派のジャン‐ヴィクトール・モロー将軍（1763-1813）やジャン‐シャルル・ピシュグリュ将軍（1761-1804）らと連繋して暗殺計画を立案していた時，逮捕された「ふくろう党」員が，処刑前にカドゥーダルらがパリに潜伏している事を洩らしたため，この告白が手掛りとなり， 3 月 9 日に遂に逮捕されてしまう。一味は 6 月 10 日に死刑判決をうけ，12 日に同志 11 名と共に処刑された。 5 月 18 日にナポレオンが皇帝に即位した事を知り，「国王をつくりたかったのに，皇帝をつくってしまった！」と悔しがったという。ルイ 18 世は彼の遺族を貴族に列し，カドゥーダルの忠誠に報いた。

26）Louis Antoine Henri de Bourbon, duc d'Enghien（1772-1804）：フランスの王族の名家コンデ家の末裔。彼は，父コンデ親王ルイ・アンリ・ジョゼフ・ド・ブルボン（1736-1818）の組織した亡命貴族の反革命部隊「コンデ軍」の一員として勇敢に戦った。しかし 1801 年にこの部隊の解散と共にバーデン大公国の小都市エッテンハイムで隠退生活を送っていた。ナポレオンはカドゥーダル一味の一人から自分たちの同志にブルボン家の人物がいるという告白を受け，確証もなかったが，ライン河の国境近くに長い間潜伏してフランス国内の反乱分子と連絡を取り，反革命の反乱を企図していたとみられるアンギアン公が犯人ではないかと推測したのである。彼は公爵拉致計画を立案し発令する。ナポ

レオンの密命を受けた竜騎兵部隊は 1804 年 3 月 15 日夜半にライン河を渡河，エッテンハイムに急行し，公爵を逮捕連行して，パリ郊外の国事犯収容のヴァンセンヌの牢に監禁した。軍事法廷に引き出された公爵の抗弁にも不拘，法廷は反逆罪により死刑の判決を下し，即座に刑は執行された（1804.3.21.）。弁護士もつけず僅か一日の審判によるこの裁判と処刑は，全ヨーロッパに恐怖政治の再開かという大きな衝撃を与えた。中立国の独立を侵犯した重大な国際法違反と共に，ナポレオンの最大の失策とされている。アンギアン公の処刑は，ナポレオンが目指した反革命分子を恐怖せしめる効果はあったが，憤激と憎悪をより強く喚起させ，それまでバラバラだった反ナポレオン陣営を一致団結させてしまい，政治的にはマイナス効果しかでなかったのである。その上彼には弑逆者という汚名もつけられた。

27）Charlotte-Jeanne Béraud de Lahaie de Riou, marquise de Montesson（1737-1806）：老人だった夫モンテソン侯爵の死（1769）後に，パリに上京しヴェルサイユ宮に伺候し，宮廷の人気者になる。攝政だったオルレアン公フィリップ（1674-1723）の孫のオルレアン公ルイ‐フィリップと秘密結婚したが旧姓を名乗り続ける。オルレアン公の屋敷パレ‐ロワイヤルに居を移すが，人柄の良さと才能で尊敬された。少々気紛れでふさぎ勝ちな夫の気を晴らすため，彼女は劇作し自ら主演している。夫の死（1785）後は引退生活を送っていたが，公爵領からの莫大な収入を貧民救済の慈善事業に使っている。大革命時代，少しの間投獄されたが（1794），ジョゼフィーヌを知ってからナポレオンの愛顧を得て公爵領の補償とオルレアン家の人々への年金の大幅な増額を獲得している。戯曲や小説など幾つかの作品を残しているが，見るべきものはない。劇作『シャゼル伯夫人』*Comtesse de Chazelle* がフランス座で上演されたが，完全な失敗だったという。

28）Maria Letizia Ramolino Bonaparte（1750-1836）：コルシカの名家に生れた気丈な賢しい美少女は，14 歳でシャルル・マリ・ブオナパルト（1746-1785）と結婚，13 人の子宝に恵まれる。但し 5 人は夭折し 8 人が成長し，ナポレオンは次男である。コルシカの征服者フランスが統治政策のため島の貴族たちを優遇し登用するようになり，一家の生活もやっと軌道に乗る。1785 年に夫を失って，その時 35 歳の彼女はその後 51 年という長い未亡人生活を送るようになる。息子ナポレオンの出世と共に，彼女の生活環境は激変し，如何なる贅沢も許される身分となったが，彼女はコルシカ時代そのままの質素な生活を送り，特に豪華な衣裳を愛用した派手な嫁のジョゼフィーヌと並ぶと，彼女の女中のようにみえたという。彼女は慈善事業にいそしみ，信心深い敬虔な日々を送っていたので，ナポ

レオンのローマ教皇に対する侮辱的な言辞を悲しんだのである。帝国崩壊後はローマに移住し，ピウス 7 世の保護の下に静穏な一生を送った。ナポレオンもこの質朴な母を生涯を通じて敬愛した。

29）ラ・フォンテーヌの『寓話』巻 6 の第 19 話「香具師」の一節。香具師が 10 年後にロバを雄弁家に仕上げる，と国王に約束をし，もし出来なかったら絞首刑になってもいい，と大見得を切る。宮廷人の一人がお前が絞首されるのを見るのが楽しみだというと

相手はこたえた。「そのまえに，
国王かロバか，それともわたしが，死んでいましょう。」
（今野一雄訳，『寓話』（上），岩波文庫，320 頁）

ナポレオンもなかなかシニカルである。

30）Charles François Lebrun, duc de Plaisance（1739-1824）：政治家だが，タッソの『エレサレムの解放』*La Gersalemme liberata*（1580）やホメロスの『イリアス』*Ilias* の散文訳を出した文人肌の人物。王領監察官から三頭政治執政官モープー（1714-1792）の秘書官となったが，モープーの失脚と共に退官する（1774）。三部会議員（1789），ついで国民議会議員，五百人会議員（1795），同議長（1796）と進むが，もっぱら財政問題を専門にした。恐怖政治時代に，穏健派のため一時投獄された。霧月 18 日のクー・デタの際ナポレオンに協力，その報奨として第三統領に任命された。財政と司法制度再建に努力し，財務総監となり会計検査院を創設した（1804）。1810 年にオランダ総督ついで貴族議員になった（1814）。ナポレオン廃位の署名はしなかったが，ブルボン王家に恭順した。

31）Henri Benjamin Constant de Rebecque（1767-1830）：フランスの思想家，作家，政治家。スイスのローザンヌでフランス系の家庭に生れる。オランダ軍に勤務していた軍人の父の関係で，イギリスとドイツで教育を受け，1786 年に 20 歳以上も年上の閨秀作家シャリエール夫人（1740-1805）を知り深い影響を受けた。1788 年から 93 年までブランシュヴァイクの宮廷で侍従をした。スイスに帰国してスタール夫人を知り（1794），以後 1808 年まで波瀾の愛人関係を続ける事となる。亡命プロテスタントの家系を理由にフランス国籍を取得，政治の場で活躍しようとして，霧月 18 日のクー・デタの後，法案審議院議員となるが，共和的自由主義の立場のためナポレオンからその地位を追われた（1802）。スタール夫人と共にドイツに亡命，後に彼女の邸のコペに帰り，その滞在中に心理小説の傑作『アドルフ』*Adolphe* を創作した（出版は 1816 年）。王政復古を一度は歓迎するが，百日天下で復活したナポレオンに魅了され，顧問官となり憲法附加条項を起

草する。このため国王政府から国外追放処分を受けるが（1815-16），許されて帰国，下院議員となり反政府派の領袖として自由主義擁護の立場に立って雄弁をふるい，学生や知識人のみならず一般大衆の熱狂的支持を得た。彼の各国の政治や議会に関する豊富な知識は同僚議員たちを大いに啓発した。責任内閣制をはじめてフランスに紹介したのも彼である。政論や宗教論の著書もあるが，前記『アドルフ』の作者として文学史にその名を残している。また彼の日記や書簡集は当時の政情や同時代人の動向を知る上で第一級の資料である。

32）Jeanne-Françoise-Julie Adélaïde Bernard, dame Récamier（1777-1849）：リヨンの銀行家の娘で，16 歳で 42 歳の銀行家ジャック・レカミエと結婚した（1793）。才智と美貌で多くの賛美者を魅了し，彼女のサロンには統領政府時代に有名人が蝟集した。スタール夫人と親交を重ねたため，帝政時代になるとナポレオンにより国外追放処分を受けた。プロシャのアウグスト親王から求婚されている。帝政崩壊後に帰国，再びパリ社交界の花形として復活，再び多くの賛美者に取り囲まれたが，その中にはウエリントン将軍，バンジャマン・コンスタン，シャトーブリアンがいる。特にシャトーブリアンは彼女の最も熱烈な賛美者で，彼女も彼の愛に答えたといわれる。

33）rue de Sèvres：第 6 区，第 7 区，第 15 区を走る道路で，長さ 1500 米，幅 18 米から 24 米でクロワ - ルージュ四辻からパストゥール大通りを結ぶ。L'Abbaye-aux-Bois はこの通りの 16 番地にある。この女子修道院はシトー教団に属し 1207 年にノワイヨン教区のバティ Batiz に創設され，後にこの地に移転してきた。修道院は周辺の森林を買収し敷地を拡大し，礼拝堂を新築したが，定礎式は攝政オルレアン公の母君が出席して挙行された。1790 年に修道院は閉鎖され，恐怖政治時代には牢獄に転用された。1807 年にアウグスチノ会に属するノートル - ダム教団が買収し，貧しい少女のための無料の職業教育校を開設（定員 250 名），同時に未婚の女性用寄宿校と社交界を引退した貴夫人のための隠退所を開設した。破産し中年になったレカミエ夫人はここで 30 年間暮している。1819 年から 26 年までは 4 階の小さな部屋で，1826 年から 49 年までは 2 階のより広い部屋でサロンを開いている。1814 年に亡命から帰国した彼女は最初アンジュー街 31 番地に住んだが，42 歳の時に此処に移住しなければならなかったのは，不幸に見舞われて財産を失ったからである。しかしながら昔に変らぬ賛美者を集めて，特に文化人のサロンとなった。

34）le Véry：パレ - ロワイヤルの中庭を囲む柱廊の一つガルリー・ド・ボージョレの 83 番地から 86 番地を占めていた有名なレストラン。以前はチュイルイ宮の庭園フイヤン・テラスで営業していたが，1808 年に此処に移転し，定価で食事を供する最初の大レスト

ランである。あとの 2 つは不詳。

35）café du Caveau（ou du Perron）：このカフェも同じ 89 番地から 92 番地を占めていた。1799 年にこの場所で開業した。このカフェは歌劇作曲家ピッチーニと同じくグルックの双方の支持者が集合する場所だった。マリ‐アントワネットは自分の歌の先生であるグルックを支持したが，宮廷もパリ市民も二手に分れて，互いに優越を競ったのである。名優タルマ，詩人のアンドレ・シェニエ，画家のダヴィッドらもこの店の常連だった。

36）Niccolo Piccini（1728-1800）：イタリヤの作曲家。オペラ・コミック *Le Donne dispettose* でデビュー（1754），ナポリやローマで活躍していたが，1776 年，グルックに対抗させようとしたラアルプやマルモンテルの招きに応じてパリに来た（1776）。グルックの改革歌劇に反対する人たちの支援を受け，純イタリヤ風の喜歌劇 opera buffa を創作し対抗したが，遂に及ばなかった。1781 年に，双方が同じテーマ「タウリケのイフィゲネイア」*Iphigénie en Tauride* で作曲して試合をしている。ルイ 16 世時代に音楽学院院長になったが，フランス大革命で一時ナポリに帰国（1795）した後，再びパリに戻り（1798），国立音楽院の審査官になった。マルモンテルがほとんどを作詞したオペラもある。代表作は『ロラン』*Roland*（1778）など。他に 120 篇ほどの歌劇がある。

37）Christoph Willibald, Chevalier von Gluck（1714-1787）：ドイツの歌劇作曲家。聖歌隊の少年として最初の音楽教育を受け，次にプラハ（1732），ウィーン（1736），ミラノで学び，この地で『アルタセルス』*Artaserse* を発表して認められた（1741）。パリに一時滞在してラモーの作品を知り（1745），次にロンドンに赴きヘンデルを知った（1746）。ドイツ，イタリヤの各地を旅行した後，ウィーンに定住しハプスブルグ家の宮廷歌劇場の楽長になった（1754-64）。彼は声楽の技巧が優越するイタリヤ正歌劇 opera seria の弱点を剋服するため歌劇を改革し，新様式の創造を念願とするようになった。フランス・オペラを押し潰しているバレーの場面の多さと同じくイタリヤ・オペラの複雑に錯綜している筋を排除して，グルックは単純明快で古典的な劇的アクシオンを持った歌劇を創作した。これらの作品では詩と音楽が統合され，あらゆる過剰な技巧はカットされ，ドラマチックな情況が強調され，偉大なる感情をこめた歌詞が歌われるのである。「音楽家より詩人であり画家である」事を彼は目標にする。*Orfeo ed Euridice*（1762）はウィーン市民を感動させたが，彼は当時世界の芸術の都と目されるパリを征服せんとして来仏した（1773）。同国人の誼で王妃マリ・アントワネットの後援を得たグルックは，1774 年 4 月 18 日，フランス歌劇の処女作『アウリスのイフィゲネイア』を上演し成功，彼の作品をフランス訳

にして上演，1779 年頃までにはパリ市民のアイドルになった。しかし彼の革新的歌劇に反対する人々がピッチーニを擁して挑戦したのは前記の通りであるが，彼らの敵意の底には王妃への反感が潜在していた。グルックはこの敵意に失望しパリを去り 2 度とフランスの地を踏むことはなかった。音楽の劇的表現力を創造した彼は，ワグナーの先輩といえよう。

38）André Eernest Modeste Grétry（1741-1813）：ベルギーの作曲家。聖歌隊の少年だったが，ローマに留学，次にパリに上京する途中ジュネーヴでヴォルテールと交際し激励された。フランスのオペラ・コミックの大家として 60 篇以上の作品を書くが，代表作は『獅子心王リチャード』*Richard Coeur de Lion*（1784），『村の理髪師』*Barbier de village*（1797）などである。「コメディー・リリックのモリエール」と呼ばれた。1795 年に国立音楽院の審査官に任ぜられた。彼の作風は落着きのある旋律が特色だが，構成にやや緊密感を缺いている。

39）théâtre Feydeau：第 2 区のフェドー街 19 番地から 21 番地の土地にあった。この劇場はルグランとモリノにより，1790 年に建設された。ルイ 16 世の弟プロヴァンス伯，後のルイ 18 世の招いたイタリヤ歌劇団専属の小屋だった。1791 年 1 月 6 日に柿落しをしたこの新劇場は収容人員 2,200 名，6 本の女像柱で飾られた半円形の正面玄関をもつ堂々たるものだった。イタリヤ喜歌劇が上演され，1801 年からオペラ - コミック座が 1829 年まで入った。デュガゾン夫人やサン - トーヴァン夫人らの人気歌手が出演し，デレラック，ボワルディーなどの作品を上演していたが，1829 年 4 月 16 日に老朽化などの理由で閉鎖された。

40）théâtre de la Porte-Saint-Martin：第 3 区から第 10 区に通じるサン - マルタン大通り 16 番地にある。パレ - ロワイヤルにあったオペラ座が，1781 年 6 月 8 日の火事で焼失したため，その代りの劇場を欲したマリ - アントワネットの強い要請により，建築家ルノワールによって建造された。昼夜の別ない休みなしの突貫工事の結果，ホールは 75 日間で完成した。桟敷席 4 階，収容人員 1,800 名のこの劇場は，1781 年 10 月 27 日に柿落しをした。この日の出し物は皇太子誕生（10.22.）を祝賀したピッチーニ作のオペラ *Adèle de Ponthieu* であった。無料公演の故もあり，一つの桟敷席に 20 名も詰め込んだので，6,000 名の観客でまさに寿司詰めの大入り満員となった。以後，幾多の変遷を重ね，1814 年に再出発し，メロドラマや夢幻劇などを上演，名優フレデリック・ルメートル（1800-1876）もよく出演した。1832 年にハレル支配人に代ってから，ヴィニー，ユゴー，

デュマなどのロマン派の傑作を上演，ジョルジュ嬢，マリ・ドルヴァル，ボカージュらの名優の出演によって黄金時代を築いた。しかし 1871 年 5 月のパリ・コミューンの乱の時に焼失したが，1873 年 11 月 27 日に再開し，昔日の盛名を取り戻した。

41）théâtre de l'Opéra：パリ・オペラ座は，ルイ 14 世がペラン神父に「フランス語韻文によるオペラと音楽をもった劇」を公演するオペラ・アカデミー設立の許可を，1699 年に与えた事が起源である。ペランがカンペールとの共作オペラ *Pomone* をマザラン街の掌球場ラ・ブテーユで上演したのが最初となる。1672 年リュリが国王から「王立音楽アカデミー」設立の許可を受け，同時にオペラや音楽劇上演の独占権も手中にした。リュリはモリエールの死後，彼の一座が使っていたパレ‐ロワイヤル座を奪って，此処を本拠地とした（1673-1763）。この劇場が焼失した時，一時的にチュイルリ宮のマシーヌ座に移転したが（1764-1770），パレ‐ロワイヤルに再建を果して復帰する。所が 1871 年に再度火災に会い，ポルト‐サン‐マルタン座（1781-1794），リシュリュー街のモンタンジェ・ホール（1794-1820），ファヴァール・ホール（1820-1821）へと転々とし，最後に政府がル・ペルチエ街に建設したホールに落着いた（1821-1874）。オペラ座の名称が定着したのは 1854 年以来である。1861 年にオペラ座のための新劇場建設が決定され，建築コンクールの優勝者シャルル・ガルニエの案が採用され，1875 年 1 月 5 日水曜日に完成した。多くの有名な作曲家の作品が上演され，世界有数の劇場となっている。

42）Théâtre-Français：Comédie-Française とも呼ばれるフランス国立劇場。コメディー‐フランセーズの起源は，ルイ 14 世がモリエール一座とライヴァルのブルゴーニュ座の合併を命じた（1680）時である。この新劇団は Théâtre-Français または Comédie-Française と呼ばれ，劇の上演権を独占する特権を授与された。Comédie-Française と称したのは，当時パリでイタリヤ人劇団が出演して Comédiens-Italiens と名乗っていたのでこれに対抗する意味もあった。この劇団は常打劇場としてマザリーヌ街のゲネゴー座を持った（1673-1687）。その後フォッセ‐サン‐ジェルマン‐デ‐プレ街（現在のアンシエンヌ‐コメディー街）へ移り（1687-1770），チュイルリ宮のマシーヌ・ホール（1770-1782），コンデ館の庭園（1782-1791）と移転した。この庭園の劇場が後のオデオン座である。大革命時代は劇団員全員が反革命分子として危うく処刑されそうになったという。革命の混乱をくぐり抜け，団員が再結集した劇場が，リシュリュー街の現在地で再開されたのが，1799 年 5 月 30 日だった。1802 年には 1790 年から中止されていた国家からの補助金がナポレオンにより支給が再開され，更にモスクワ遠征中の 1812 年 10 月 15 日に勅令を発し，皇帝はフランス座の組織

と制度を決定させたのである。彼は悲劇を愛好し，特に名優タルマを贔屓にしていた。フランス座はその歴史から見ても世界的にも演劇の大殿堂といえよう。

43）Marguerite Josephine Wemmer, Mlle Georges（1787-1867）：フランスの有名な女優。父が劇場監察官で地方都市を巡察しアミアンに長期滞在していた時，彼女はこの町の劇場でデビューした。その天成の美貌と美声と豊かな表現力に，たまたまこの町に巡演に来ていたロクール嬢の目にとまり，上京する事を説得された。共和暦 11 年霜月 8 日（1802.11.29.），僅か 14 歳の彼女は『アウリスのイフィゲネイア』のクリテムテステル役でフランス座にデビューし，1803 年には準座員のパンショネールに採用されたのである。彼女の完璧な美しさ，自然でかつ情熱的な才能は一つの事件であり，パリ市民たちは彼女を鑑賞し拍手しようと劇場に殺到したのである。ナポレオンをはじめロシア皇帝など政財界の巨頭も魅了した彼女は，数々の伝説と名声に包まれ，1867 年 1 月 12 日静穏な死を迎えたが，遺言として生前の当り役であったロドギューヌの外套で身を包んで埋葬してほしい，と洩したという。

44）August von Kotzebou（1761-1819）：ドイツの劇作家。1781 年から 1795 年までロシア政府に勤務，この間に劇作に手を染め，『イギリスのインディアン』*Die Indiaer in England*（1790）などを創作した。ウィーン宮廷劇場の座付作者になったが（1798-1800），再度ロシアに渡ったり，原因不明だが，露帝パーヴェル 1 世（在位 1796-1801）の命令により国境で逮捕されシベリアに流刑になった。しかし数か月後に釈放され，再び寵愛を受けサンクト・ペテルスブルグのドイツ劇場の支配人に任ぜられた。彼は死ぬまでロシア政府外交官としてドイツ国内を旅行し，文化や政情などの情報収集にあたった。彼のこの活動が愛国的ドイツ人学生たちからロシアのスパイと断定されたのである。最初はナポレオンに対し，次にドイツの自由主義者たちに対して猛烈な戦いを挑み，ドイツ人学生たちの自由主義的風潮を嘲笑する論説を多く発表したため，憤激したイエナ大学生カール・ルードヴィッヒ・サンド（1796-1820）により，1819 年 3 月 23 日に刺殺された。才気煥発で構成の妙を得た彼の作品は幾度も成功し，当時の人気作家であった。200 篇以上の作品を残したが，代表作は『ドイツ小都市の市民』*Die deutschen Kleinstädter*（1801）である。

45）place du Carrousel：第 1 区のチュイルリ宮の庭園とルーヴル宮の間にある広場。造成は 1662 年に着手されたが中断，本格的に工事が再開されたのは 1849 年から 1852 年にかけてであり，完成したのは 1908 年だった。大革命時代は「友愛」又は「革命」広場と呼ばれ，1792 年 8 月から 1793 年 5 月までギロチンが据えられた。現在のカルーゼル凱旋

門から東方約 5 米の所にシャルル 5 世の建設したパリ市の城壁が幅 3.5 米の濠を前にして，1630 年当時は聳えており，北の方に行くとサン‐トノレ城門に至る。此処で，1429 年 9 月 8 日，パリを攻撃していたジャンヌ・ダルクが城兵の放った矢に当り，腿を負傷している。

カルーゼルとは，4 騎 1 組になって演じる騎馬パレードを意味したが，騎士が柱に吊した環を槍で突き取るゲームなども行われた。1662 年 6 月 5 日と 6 日，皇太子誕生を祝して，ルイ 14 世がこの広場で豪華なカルーゼルを中心とした祭典を挙行したため，それ以後カルーゼル広場と呼ばれるようになったのである。ルイ 14 世は馬術に秀れ，見事な乗馬振りが観客の賞賛を博した。彼は 1687 年にもカルーゼルを挙行したが，これはパリ市の招宴に応じたためである。

46）rue de Rivoli：第 1 区と第 4 区を通り，フランソワ‐ミロン街とコンコルド広場を結ぶ長さ 3070 米，幅 20.75 米から 22 米の通り。1800 年から 1835 年までかけて完成し，この道路の開通のため多くの小路が消滅した。この通りの北側は同じ正面を持つアーケード街が新築され，現在でもパリの繁華街の一つになっている。この通りの名 Rivoli は，1797 年 1 月 14，15 日にかけ，ナポレオンがオーストリー軍を撃破して勝利した戦場で，イタリヤ北部ヴェローナ市の北西にある。この勝利を記念して 1804 年にこの新しい通りに命名された。

47）Bibliothèque de l'Arsenal：第 5 区のシュリ街 1 番地にある。サン‐ルイ島の上流に架かるシュリ橋を渡ってバスチーユ広場に通じるアンリ 4 世大通りの右側にある。1352 年ケレスティヌ修道院がここに建設されたのが起源で，1512 年，パリ市が修道院の意向を無視してセーヌ川岸の敷地を没収，大砲製造所を建設，アンリ 2 世の時に国の管理下にはいり，王立武器庫 Arsenal royal となった。製造を始めた火薬の爆発のため，施設の大部分が焼失，武器庫は郊外に移転した。フィリベール・ドロルムによって再建された建物は，フーケ事件や毒殺魔ブランヴィリエ侯夫人の裁判の法廷に使用された。1757 年，アルトワ伯，後のシャルル 10 世の寵臣で陸相のポルミー侯ルネ・ダルジャンソン（1722-1787）の豪華な蔵書を中心とした図書館が設置され，1797 年には一般に公開された。作家シャルル・ノディエ（1780-1844）が館長として在職中（1824-1844），特にその初期は，このサロンが若きロマン派の集会場になった事は文学史上でも有名である。1900 年頃はホセ‐マリア・エレディヤが同じ様にサロンを開き，パルナシヤンの作家たちが参集した。

48）Bibliothèque de Sainte-Geneviève：第 5 区のパンテオン広場 10 番地にある。かって最も厳格な戒律を守っていた Collège de Montaigue の跡地に，建築家ラブルストにより 1844 年に建設された。1842 年に創設されていたこの図書館はサント - ジュヌヴィエーヴ修道院の女修道士たちによって蒐集されていた書籍や原稿を収蔵していた。1932 年にジャック - ドゥーセが蒐集していた文学関係の蔵書が寄贈されて，書庫は大いに充実した。それらのなかには，ボードレール，ヴェルレーヌ，ランボーなど近代文学関係の原稿が多く含まれている。蔵書 70 萬冊，版画 3 萬点，原稿類 3.000 部を擁するこの図書館はパリ有数の図書館の一つである。

49）Pierre Antoine Demoustier（1755-1803）：フランスの技師。ペロネの弟子で後に協力者となる。パリでルイ 15 世橋，現在のカルーゼル橋やポン・デ・ザール，オーステルリッツ橋などを架橋したが，この 2 つの橋は鉄製である。

50）pont des Arts：第 1 区と第 6 区に文字通り跨って，ルーヴル河岸とコンティ河岸，マラケ河岸を結ぶ，全長 155 米，幅 10 米の鉄橋。この橋は 1802 年から 1804 年にかけ，ドムーティエ技師により建造された。工費が 78 萬フラン余りかかったので，1848 年まで１人 1 スーの通行料が徴集された。初めての鉄橋で，それまで木橋や石橋しか見た人には奇異に見えたにちがいないし，下流のポン・ヌフに比べれば可成り見すぼらしかった。そこで橋の上に街燈をつけ，両側の手摺の脇に花壇をつくり多くの花を植え，椅子も備えつけた。車の通らない人道橋だったので，パリ市民はゆっくりとセーヌ川の景色を楽しむ事ができ，人気のデートの場所になった。コンティ河岸の拡張工事のためアーチが一つ取り払われ， 8 本になった。老朽化のため 1982 年から 98 年まで全面的改修工事が施行され，今日に至っている。橋の名の由来は芸術宮殿 palais des Arts の異名のあるルーヴル宮に続くから，という説が有力である。

51）François Joseph Bosio（1769-1845）：モナコ生れの彫刻家。若年の頃からフランスに来てパジュに学び，次にイタリヤに 17 年間滞在し，各地の教会のために製作した。1808 年パリに定住，ナポレオン，ルイ 18 世，シャルル 10 世，ルイ - フィリップと歴代の君主に愛され庇護され多くの栄誉と富を与えられた。シャルル 10 世は彼に男爵の爵位を贈与している。イタリヤで修得した優美な技巧の粋ともいえる彼の作品は，彼の名声を不動のものにした。代表作はヴァンドーム広場の円柱の 20 の浅浮彫り，ヴィクトワール広場のルイ 14 世の騎馬像，カルーゼル凱旋門の四頭立の二輪馬車像などである。その他，ナポレオン，ジョゼフィーヌ皇后，ルイ 18 世，シャルル 10 世などの胸像も製作している。

52）François René, vicomte de Chateaubriand（1768-1848）：フランスの文学者，政治家。ブルターニュ半島のサン - マロに生れ，コンブールの古い城館に移り住み，孤独と憂愁の少年時代を送った。ドールやレンヌで教育を受けた後上京，陸軍少尉となり，1786年にルイ 16 世に拝謁している。パリの社交界でラアルプやシェニエを知る。大革命に幻滅し，性来の夢想癖とルソーらの原始的自然に憧れアメリカ旅行に出発（1791.4.8.），ナイアガラなどを見物，国王逮捕の報を知り帰国（1792.1.），王党軍に参加しティオンヴィル包囲戦で負傷，イギリスに亡命する（1793-99）。ロンドンなどで苦しい貧乏生活を送りながらも創作に没頭，『革命論』*Essai historique sur les Révolutions* を完成。母国での母の死を知り，カトリックに回心する。追放を許され帰国して『アタラ』『キリスト教精髄』を公刊し文名を得る。ナポレオンに注目されローマ駐在公使に任命されるが（1803.7.），アンギアン公の処刑（1804.3.21）を知りナポレオンと訣別，官界から引退する。その後東方旅行をし『殉教者』*Les Martyres*（1809）や旅行記を書く。王政復古になり，ベルリン，ロンドン，ローマ大使を歴任，ヴェローナ会議では重要な役割を演じた。1822 年 12 月に外務大臣に就任，スペイン戦争などを指導したが 1824 年 6 月 6 日，上院での公債利率引下げ法案に反対し，「従僕の如く」内閣を追われた。王統王党派の彼は七月王政を認めず，在野の人に徹し，レカミエ夫人と終生の愛を誓いながら著述に専念した。政論，論説，紀行，小説と多くの作品を残したが，未完のまま残された自叙伝『墓の彼方の回想』*Mémoires d'outre-tombe* が最高傑作といえよう。夢想と憂愁と孤独と倦怠の「世紀病」に悩む青年は，次に来るロマン主義の主人公たちの先輩である。エクゾチスム，自然への憧憬，中世ゴシック建築への興味，鋭敏な感受性と豊かな想像力溢れる流麗な抒情的文体などなどは，シャトーブリアンをして，スタール夫人と共にロマン主義の先駆者たらしめている。

53）*Le Genie du Christianisme*：シャトーブリアンの代表作の一つ。副題は「キリスト教の美」*Beautés de la Religion Chrétienne*，1802 年の刊行，亡命先のロンドンで貧困と厭世気分のどん底にあった彼は，母の死を知り，キリスト教信仰への回帰が母の最後の願いだったと聞かされ，涙と共に信仰に回帰したという。そして 18 世紀の反キリスト教思想，百科全書派を打倒せんとの決意を固め，本書を世に問うた。4 部にわかれそれぞれが 6 篇からなる大冊だが，特に第 3 部「美術と文学」の中で，キリスト教芸術の美を描写しゴシック教会の美を賛美した第 1 篇第 8 章は有名である。また単独で発売されてベスト・セラーとなったインディアンの乙女の悲話『アタラ』は第 6 篇である。フランス中世への

関心を喚起し，エクゾチスムと世紀末の厭世主義いわゆる世紀病の倦怠をも漂わせ，美しい自然描写に満ちたこの大作はロマン主義の到来を予告する記念碑的作品になっている。

54）*Atala ou les Amours de deux sauvages dans le désert*（1801.4.3.刊）：シャトーブリアンの文名を一躍江湖に喧伝した作品。インディアンの老酋長シャクタスがフランス人の青年ルネに自分の青春時代の恋人アタラとの悲恋を物語る回想形式をとる。北米大陸の新しい原始的自然の美を華麗な文体で描写し，ロマン派の青年作家たちに強烈な印象を与えた。

（続　く）

（追　　記）

（1）　参考図書などは，〔Ⅰ〕の巻末に掲載しておりますので，そちらを御参照下さい。

（2）　前稿〔ⅩⅧ〕に校正ミスがありましたので，下線の如く御訂正下さい。

P.16. 上から 8 行目　polytecnique

P.24. 上から 3 行目　Saint-Eustache

—2006.3.5.—